

---

# 気が付いたら、攻略されそうです・・・

零堵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気が付いたら、攻略されそうです・・・

### 【Nコード】

N8720Y

### 【作者名】

零堵

### 【あらすじ】

目が覚めると、俺は女の子になっていたしかも、なんか見た事あるな・・・と、思っていたらゲームのキャラになっていて、しかも主人公とのトゥルーエンド百パーセント状態で、このままいくと一週間後にトゥルーエンドになるので、俺はこう決める

「この状況で、バットエンドを目指してやるぜ」と

そんな、性転換した彼女の物語

## くプロローグ

気がついて、目が覚めると、そこは自分の住んでいた部屋とは全く違った場所だった。

「え……って、声が!？」

目を開けて、部屋の中をしてみる。

俺のいた部屋とは随分違い、部屋にぬいぐるみが飾っていたり、鏡面台と勉強机があったり、まるで女の子の住む部屋だと思った。それにさっき出した声も高かったし、もしかして……と思い、胸とか触ってみる

自分で触ってみて気がついた事、大きくはないけど、確かにそこに胸が膨らんでいて、あわてて股間も確認、そこには、いつも見慣れた物はなかった

これで、俺は確信した

俺は、女の子になってしまったと言う事に  
けど、なぜそうなったのが意味不明だった、覚えてる限りでは家でゲームをしていて、急に眠気が襲ってきて、気が付いたら、こうなっていたからである

ネットとかで、転生とか性転換とかを使用している小説とか見て面白いな？まあありえなくけどな？とか、思っではいたが、まさか自分になれるとは思わなかった

着ている服装も、いつも俺が着ている服装ではなく、ピンクのパジャマだったし、よく見てみると、ブラまでしているので、確実に女だな……と、意識してしまったのである

で、女になったのは、まあおいといて、俺は一体誰になったんだ？  
と思い、鏡面台があるので、さっそく使っていたベットから降りて、鏡面台で、自分の姿を見て見る事にした

そこに映っていたのはと言うと

「え・・・水無月あかね・・・？」

そこに映っていたのは、栗色の髪のショートカットのかわいい感じの顔で、その顔には覚えがあった

何故なら・・・その水無月あかねと言うのは

俺のプレイした事があるゲーム「ラブチュチュ」に出てくるヒロインだったからである

という事は・・・俺、ゲームのキャラになったのか！？と、心底驚いてしまった

やった事のあるゲームだから、状況を確認する事にした

まず、部屋に飾ってあるカレンダーと、時計で日にちを確認してみる  
「っげ・・・七月一日だと・・・？」

カレンダーは、七月となっていて、日にちが一日だった

ゲームでの話で言うと、この「ラブチュチュ」は、6月の初めからスタートして、七月八日で終わりを迎えるのである

8日を過ぎると、トゥルーエンドか、バットエンドに進み、それでゲームが終わる

最後にはその後どうなったのか、ワンシーンが流れるので、ゲームではよくある設定でもある

水無月あかねを攻略対象にして、やった事のある俺から言わせると、水無月あかねは、六月の最後の日で、ストーリーが劇的に変化するのである

つまり六月の時点で、選択肢を間違えると、バットエンド確定だったから

日にちが七月という事は、百パーセント、トゥルーエンド確定状態なのであった

選択肢も、どれを選んでも、トゥルーエンドだったので、それはよく覚えていた

という事は・・・

「俺・・・トゥルーエンド確定ルートだから、主人公と恋愛する羽

目になるのか!？」

俺は、想像してみる、主人公との恋愛をする事は  
はつきり言っと、嫌だった、男だったので、今さら男を好きになれ  
ないし

こんな姿になっても、女の子大好き!なのである

だから、俺は、こう決めた

「決めた、絶対にバットエンドになってやる・・・」  
そう決めて、行動にうつす事にしたのであった

## 「プロローグ」(後書き)

いきおいとノリで、書いてみました。

うん、これも書こうと思ったら、書こうと思います。」

〜第一話〜一日目〜朝〜（前書き）

はい、零堵です

今日は、二回目の投稿です〜

〜第一話〜一日目〜朝〜

俺は、とりあえず水無月あかねとなってしまうたので、これからの行動を考えてみる

確か、ゲーム「ラブチュチュ」では、色んなイベントがこれからある筈なので、それを出来るだけ、回避する方向で、動こうと思う。

まず、時計で時刻を確認してみる。時刻は、朝の七時となっていた確か、水無月あかねは、高校に通っている一年生だったので、カレンダーを見てみると、今日は月曜日

と言う事は・・・平日なので、学校に行かなくちゃいけないかと思うなので、俺は、着ているピンクのパジャマを脱いだ

パジャマを脱いで、現れたのは、白色のブラジャーだった

うん、改めて思うと、女の子になったんだな・・・とつくづく実感してしまった

触りごごちはどうなのかな〜と、思い、胸を触ってみる

「……………」

感触は、結構柔らかく、なんかフニフニしていた

おまけにちよつと、体が熱くなった気がして、即触るのをやめた

もしかして・・・俺、ちよつと感じてしまったんだろ〜か・・・と、思ってしまったのである

気を取り直して、下も脱ぐ

下も上とお揃いなのか、白色のパンティーを履いていた

「……………男のままだったら、興奮するんだろ〜けど・・・今じゃなあ……………」

元の姿だったなら、興奮するのも知れないが、自分の体になってしまったので、ちよつと、残念な気分になった

気を取り直して、俺は、ハンガーにかかっている、高校の制服と、折りたたんであるスカートを持って、着る事にした

うん、制服とスカートは、ゲームと一緒になんだな・・・、と思った



のである

ちなみに色は、クリーム色で、リボンが青色で、スカートの色が緑色の、ちょっと変わった感じの制服だった

女物の制服なんか着た事がなかったので、苦戦しながら、何とか着る事に成功し、鏡面台で、自分の姿を見ている

鏡に映っていたのは、制服を着た、水無月あかねの姿が、映し出されていた

改めて見てみると、思いつきり美少女だよな・・・と、思う

主人公が、惚れるのもなんかわかる気がするな・・・と、思ったが俺は、主人公と恋愛する気は全くないので、主人公に惚れられないように、頑張る事に決めたのである

そう思っていると、外の部屋から

「あかね？起きてる？朝食出来たわよ」

そう聞こえてきた

確か・・・ゲームだと、俺に話しかけてくる人物は、水無月あかねの母親、水無月文香だと、思われる

俺は、返事しないのもなんなので

「うん、起きてるよ、今からいくね」

そう、答えて、自分の部屋を出るのであった

部屋から出て、すぐにリビングが見つかり、その部屋に行く

そこにいたのは、朝食を用意して、エプロンを付けた、ゲームと同じ姿の、水無月文香さんがいた

「あ、あかね？起きたのね？いつもは、遅刻ぎりぎりだったじゃない？」

「そ、そうだったけ？」

「そうよ？いつも私がおこしに行ってあげてたんだから、一体どういう心境なのかな？」

「私だって、たまには早起きするよ」

「そう？それは、助かるわね？あ、朝食出来てるから、食べて学校行きなさいね？」

「あ、はい」

そう言つて、俺は、用意された朝食を食べる事にした。  
うん、かなりおいしい、文香さんは、料理上手なのか・・・と、感  
心してしまったのである。

あっという間に食べ終わつて

「あ、そろそろ出かけなさい？あかね？」

「あ、うん、行ってきます」

そう言つて、家を出て、通っている高校とやらに行く事にするので  
あつた

高校の場所は、名前を覚えているので、問題はなかった

さて、高校に行つて、何から始めようか・・・と、考えながら、通  
学路を歩く事にしたのであつた・・・

〜第一話〜一日目〜朝〜（後書き）

アクセス数見てみたら、一日に200人以上ですと!?

ありがとうございます

感想くれると、作者のやる気があがります〜

〜第二話〜 一目目〜学校潜入〜 (前書き)

はい、零堵です。

投稿します〜

## 〜第二話〜一日目〜学校潜入〜

まず、外に出て気がついた事は、街中もゲームに登場する街並みだった

まあ、人がちゃんと動いているので、これが現実なんだと、実感してきた

俺は、通学路を歩いて、通っている高校と思われる、建物に辿りつくゲーム「ラブチュチュ」では、私立白稜高校となっていたが、校門を見てみると、「私立白稜高校」と、表記されていた

うん、ゲームで見た学校と、同じ形をしていて、後者の高さも同じだった

もうここまで来たら、驚く事はしないでおくか・・・と思い、校舎の中に入る

水無月あかねは、確か1年4組のクラスだったので、1年4組の教室を、探してみる

すると、二階の奥に、1年4組を見つけたので、その中に入るとクラスメイトがもう、ほとんど座っていた

俺の席は、どこかな・・・と探して、机にかかっている持ち物の名前に「水無月あかね」と、書かれてあるのを見つけて、その席に座るうん、スカートなんか初めて着たからか、なんかスースーした席に座って、これからどうしようかと、考えていると

「おっはよゝあかね？」

「・・・？」

ゲームの中では、見た事のないキャラが、話しかけてきた姿は、黒髪のシヨートで、かなり胸が大きい、Dぐらいは確実にあると、思われる

一体・・・誰なんだろゝな・・・と、思っていると

「どうしたの？あかね？私の事見て、何か考えてるけどさ？」

「えっと・・・誰？」

「ちょっと、それ本気で言ってるの？」

「う、うん、ちょっと階段から落ちちゃって、人の名前とか、忘れちゃったんだ」

「適当な嘘をついてみると」

「そうなの？大丈夫？まさか、大親友の私の事を忘れるなんてね？私の名前は、笹村理恵子、理恵子でいいわよ？」

「わ、分かった、ありがと、理恵子」

あかねにこんな親友がいたのか・・・驚いたな・・・

「ところでさ？あかね？」

「な、なに？」

「先輩とは、上手く言ってるの？好きなんでしょう？先輩の事」

先輩って事は・・・もしかして・・・

主人公の事か！？

確か、ゲームでの設定の主人公の名前は「初崎孝之」だった筈

「そ、それって、孝之先輩の事かな？」

「そうよ、で、孝之先輩に誘われたのかな？その所、詳しく教えてくれない？」

「さ、誘われてないよ？（まあ、この後誘われるかもしれんけど）」

「ふ〜ん・・・なんかあやしいわね？」

そう理恵子が言つと、キーンコーンと、チャイムが鳴り始めた

「っち、詳しく聞こうと思ったのに〜まあいいわ、あかね？また後でね」

そう言つて、理恵子は自分の席に戻って行った

これは、とりあえず助かったのか・・・？と、思ってしまったのであった

うん、とりあえず今日のやる事は「主人公の初崎孝之と他のキャラの好感度を調べる」と、決める事にして、授業を受ける事にしたのであった・・・

〜第二話〜 一目目々学校潜入〜 (後書き)

一日のアクセス数が、350人ですと!?

すごいですね・・・こんな初めてですよ

これからも、この物語をよろしくお願いします。

〜第三話〜 一目目〜高村草〜（前書き）

はい、零堵です。

アクセス数すごいですねw



〜第三話〜一日目〜高村肇〜

まず、やる事は「初崎孝之と他のキャラの好感度を調べる」と決めたので、実行に移す事にした

授業は、なんか簡単だった、まあ先生に当てられもしなかったので、適当に聞いているふりをして、黒板に書かれている文字をノートに写す作業だけをしていて、授業が終わる。

お昼になり、確か、この学校には学食があったので、そこに行ってみる事にした。

そう言えば・・・この世界でのお金ってどうなってるんだろ〜な？それを確認してみる事にして、自分の鞆の中を調べてみる

中には、ノートや教科書の他に、使用がわからない布状の物も入っていた。

もしかしてこれが、ナフキンとか言う奴なのだろ〜か・・・？。そして、ピンクの財布らしき物を見つけて、中身を見てみる。

中には、笹村理恵子とのツーショット写真や、小銭とお札が入っていた。

よく見てみると、小銭もお札も、見た事のある物だったので、これは使えるんだな・・・と、実感した。

そのピンク色の財布を持って、学食へと向かう。学食に行くと、生徒が大勢いて、結構混雑していた。

その学食の券売機を見てみると、お金を入れるスペースがなく、ボタン表示が光っているの

生徒もお金を入れる事なく、ボタンを押しているの、これは、全品無料なのか！？と、驚いてしまった。

まあ、何にしよ〜かなと、考えて、きつねうどんのボタンを押すきつねうどんと書かれた券が機械から出てきて、食堂のカウンターに置くと、すぐにお盆に乗せたきつねうどんが出てきた。

お盆をもって、あいている席に座って、きつねうどんを食べる

うん、マジで美味しい、とりあえず飯に関しては、この世界と前の世界とは、結構同じらしい。

食べながら、まわりを確認してみると、ゲームでの攻略候補の一人を見つけた。

髪の色が銀髪のアトレイトで、かなりの美人さんに見える

名前は「高村董」と言って、確か三年生の上級生である。

ゲームでは、いつも屋上にいて、空ばかりを見ている、結構不思議ちゃんな感じの人だと、高村董を攻略対象にした時に、思った。

高村董は、食べ終わったのか、食堂から出て行く。

向かう先は、多分屋上なんだろうな・・・と思い、俺も食べ終わって、屋上に向かう事にした。

屋上に行くと、暑い日差しの中に、外を見ている高村董の姿を見つけた。

俺は、高村董に話しかけてみる。

「あの、高村先輩ですよね・・・？」

「・・・貴方は？」

「私、一年の水無月あかねと言います、高村先輩に聞きたい事があって」

「私に聞きたい事？一体何？」

「あの、孝之先輩の事、どう思ってます？」

「孝之・・・ね・・・そうね・・・、まあ、私がここにいる時、

「何してるの？」とか、話しかけてきたのが彼だったわね・・・まあ、彼と一緒にいるのは楽しいわ、これが恋愛感情なのかどうかはわからないけど・・・それにしても、あかねちゃんだけ・・・？孝之の事を聞いてくるなんて、好意を持っているって事なのかしら？」

「いえ、違います、孝之先輩が私にしつこく迫ってくるので、私は嫌なんです、だから先輩と仲良さそうな人がいるって聞いたので、話しかけてみたんです」

「そうだったの・・・孝之、そんな事言っただけだったわね」

「なので、高村先輩、孝之先輩の事が好きなら、ガンガンアタックして下さいね？それじゃあ」

そう言っつて、俺は、屋上から出て行く事にした。

これでよしと、次は他のキャラのところにも行く事にしたのであった。

〜第三話〜 一目目〜高村草〜（後書き）

俺かの書いていたら、全部いきなり消えたので、こっちの物語を書く事にしました。

この物語もよろしくです〜

〜第四話〜 一目目〜風見理子〜（前書き）

はい、零堵です

続きの話です。バグって消えたので、編集しました。

〜第四話〜 一目目〜 風見理子

屋上に行った後、次に向かったのは、図書室に行く事にした。何故図書室に行くのかと言うと、図書室の中に、攻略対象キャラがいるからである。

図書室はすぐに見つかり、まあ部屋名に図書室って書かれてあるからここがそうなんだろ〜な・・・とか、思ってしまった。

図書室の中に入ると、そこは古ぼけた棚がいっぱいおいてあって、本の数も結構沢山あった。

俺は、その中を歩きながら、目標の人物を探していると、本を読んでいる彼女を見つけたので声を掛けてみることにしたのであった。

「あの、風見先輩ですよね？」

「・・・は、はい？そ、そうですか・・・」

俺が話しかけたのは、ストレートな緑色の髪の色をしている人物で、二年生の風見理子であった。

普通に考えて、ありえねえ色だろ？とか思うのだが、そこは深く考えない事にした。

「私、一年の水無月あかねって言います、風見先輩に言いたい事があって来たんです」

「わ、私に言いたい事・・・？一体何の用？」

「実は、孝之先輩の事で、知ってますよね？孝之先輩の事」

「孝之君？ま、まあ知ってるけど・・・」

「私、孝之先輩に言い寄られて、本当に困っているんです、孝之先輩の事、どう思ってます？」

「どう思ってるって・・・孝之君は、私が図書室に本を返しに行った時にぶつかって、「大丈夫？持ってあげるよ？」って言って来たけど・・・それから、私によく話しかけて来て・・・それで、あ、この人は優しい人なんだな・・・ってちょっと思っただけで・・・」

「じゃあ、嫌いなんですか？」

「い、いや・・・別に嫌いって訳じゃ・・・」

「じゃあ、好きなんですか？だったら、がんがんアタックしてみてもいいですか？」

「で、でも・・・私、引込み体質だし・・・かわいくないし・・・」

「先輩、可愛いですよ？」

何でそう言えるのかと言うと、この風見理子は眼鏡をかけているのだが、ゲームの終盤になると、コンタクトにするので、そしてその素顔が、かなりの美少女になるからである。

まだこの段階では、眼鏡をしているので、主人公との好感度が低い状態だな・・・と思われる。

「そ、そうかな・・・」

「ええ、自信持つてください！まずは話しかける事から大事ですよ？」

「そ、そうよね・・・う、うん、頑張ってる・・・」

「私、応援してますね？じゃあ、用件はこれだけなので、お邪魔しました」

そう言って、俺は図書室から出て行く事にした。

うん、こんな感じでいいだろ、あとはどうなるかって感じだな・・・って思い

次にどうしようか、考えていると、キーンコーンとチャイムが鳴ったので

まだ攻略対象キャラがいるのだが、声をかけるのは放課後にするか・・・と決めて

自分のクラスに戻る事にした。

クラスに戻ると、笹村理恵子が話しかけてきた。

「あかね？どこ行ってたの？私、聞きたい事あったのにさ？」

「ちよつと用事があったね・・・移動してたんだ」

「ふん・・・まあいいわ、授業始まるし、授業終わったら聞か

ね

「う、うん、分かった」

そう言っつて、理恵子は自分の席に戻る。

・俺も自分の席について、午後の授業を受ける事にしたのであった・



〜第四話〜 一目目〜風見理子〜（後書き）

アクセス数すごいですね、ほんと・・・  
読んで下さり、お気に入りにも入れてくださってありがとうございます。  
ます。

あとジャンル別週間ランキング（学園）に載りました。順位も結構  
上位なので、嬉しいです。  
これからもよろしく願います。

く第五話く一日目く沖縄ユウく(前書き)

はい、零堵です。

続きの話を投稿します。

く第五話く一日目く沖島ユウく

午後の授業も無事というか、いとも簡単に終わった授業が終わったので、早速行動にうつそうとすると、笹村理恵子がやって来て、こう言ってきた。

「あかねく？聞きたいんだけどさ？」

「な、何？理恵子？」

「孝之先輩の事好きなんでしょ？告白とかしたの？」

「い、いや・・・でも、なんでそんな話に？」

「いや、だつてあかねが言つてたじゃない、最近気になる先輩がいるのつてさ？で、私なりに調べたわけですよ？で、候補にあがったのが孝之先輩つてわけ？で？告白するんでしょう？」

「・・・いや、わかんないかな・・・」

「ふん・・・まあ、私は応援するわよ？頑張りなさい？あかね」

「あ、ありがと、じゃ、じゃあ私は、行く所があるから・・・」

そう言つて、教室から出ていく。

うん、応援されても、困るのだが・・・

とりあえず気を取り直して、主人公のいるクラス、2年2組に向かう事にした。

何故、向かうのかと言うと、そのクラスの中に、攻略対象者がいるのである。

2年2組は、直ぐに見つかつて、教室の中に入る。

教室の中は、数人の生徒がいて、帰り仕度をしている者や、話し合っている者もいた。

その中に目標の人物を見つけて、声をかける。

「あの、ちよつと来て下さい」

「え・・・？僕に？」

「はい、貴方にです」

そう言つて、手を掴み、二人で教室の外に出て、人気のない場所に

たどり着いた。

人気のない場所にたどり着いて、手を離す。

「一体何なのかな・・・？こんな所に僕を連れ出して・・・え〜つと・・・君は・・・」

「私は、一年の水無月あかねって言います。沖島ユウ先輩に話がありました」

「僕に話？一体何・・・まあ、この状況から察すれば・・・ある程度予想はつくけど」

「じゃあ、単刀直入に言いますね・・・、先輩・・・女ですよね？」  
そう、この沖島ユウは、男子の制服を着ているのである。

姿は、黒髪のショートに、結構背が高く、水無月あかねとの身長差が、十cmも違うのである。

普通に見た目は、結構かつこい美男子に見えるが、ゲーム「ラブチュチュ」だと、プロフィールを見た時、男装をしていると書かれてあったので、女と確信しているのであった。

「な、何の事・・・？僕は、男だけど・・・」

「そうですか？じゃあ・・・服脱いでくれますか？」

「・・・え！？ちょ、ちょっとそれは出来ないかな・・・ここで脱ぐ事じゃないし・・・」

「脱げないんですか？じゃあ、やっぱり女ですよね？」

「だから、そうじゃなくて、そ、そう、僕、体に傷があって、それを見せたくないんだ、だから・・・」

「じゃあ、えい」

そう言つて、俺は、沖島ユウの胸を鷲掴みにする。

うん、小さいけど、柔らかい、この自分の体と同じサイズぐらいなのかも？と思つてしまった。

「い、いきなり何するの！」

そう言つて、俺を突き飛ばす。

「先輩の胸、柔らかかったです、やっぱり女の子ですよ？私、先輩が女の子って知つてたから、こんな人気のない場所に連れ出した

「んですよ？」

「……よく、僕が女の子と分ったね……、秘密にしといたのに……」

「大丈夫です、先輩？私、誰にも先輩の事、言いふらしたりしませんから」

「ほ、ホント？」

「はい、で、先輩に聞きたい事があるんです、先輩の同じクラスの、初崎孝之先輩の事って、どう思ってます？」

「孝之の事？うくん……ま、まあ一緒に遊んだりして、ちょっとかつこいいな……とか、思った事はあるけど……なんでそんな事を聞くの？」

「私、孝之先輩に言い寄られてるので、それを回避したいんです、孝之先輩の事が好きだったら、行動してくれると嬉しいんですが……」

「行動ね……、ま、まあ、僕から言わせると、孝之って僕の事、男と思ってると思うんだけど……、自分からカミングアウトとか、してないし……」

「自分からは、しないんですか？」

「しないよ、ま、まあ、バレたら正直に話すけど……」

「そうですね、私は、応援してますから、頑張ってください、沖島先輩、じゃあ、話す事はこれだけなので、私は行きますね」

そう言っつて、俺は、沖島先輩から、離れて行った。

うん、こんな感じでいいかな……まあ、あとは行動する事を、期待するしかないか……

さてと、他の三人に声をかけたので、あともう一人いるので、俺は、その人物に会う事に決めて、校舎内を探す事にしたのであった。

〈第五話〉 一目〈沖島ユウ〉 (後書き)

この四日間で、ユニークアクセス数が6000を超えました。  
読んで下さり、お気に入りにも登録してくれて、ありがとうございます。

〜第六話〜 一目〜西村舞〜 (前書き)

零堵です。

続きの話、投稿します。

〜第六話〜 一目目〜西村舞〜

あと一人で、攻略対象キャラ全てなので、俺は、校舎内を探す事にした。

まず、屋上に行ってみる。

屋上は、夏の日差しで、結構暑く、長くいると汗が出てくる感じだった。

その中にいるのは、三年の高村董だけだったので、ここにはいないな・・・と、思い、違う場所を探してみる。

次に向かったのは、図書室に向かった。

図書室は、昼休みと違って、人が沢山いたので、目標の人物を探してみる。

見つけたのは、本を読んでいる、二年生の風見理子を見つけた。

理子を見つけたので、俺は、聞いてみる事にした。

「風見先輩、こんにちは」

「あ、あかねちゃんでしたっけ？ま、また何か？」

「あのですね・・・西村先輩の居場所って、分かりますか？」

「西村さん？・・・西村さんなら、今頃、校庭じゃないかしら・・・、さつき見かけたし・・・」

「ありがとうございます」

そう言って、理子先輩と別れる。

校庭か・・・、とりあえずまだいると信じて、校庭に出てみる。

校庭には、部活動をやっているのか、結構沢山の生徒が、体操着を着て、動いていた。

その中にひときわ目立つ存在を探してみると、見つけた。

体操着を来て、運動場を走っている、西村舞を見つけたのである。

何で、目立つ存在なのかというと、この西村舞は、髪の色が水色なのである。

水色の髪にポニーテールに巨乳なので、かなり目立っている。



ゲーム「ラブチュチュ」だと、陸上部と言う設定なので、今の時間だと、走りこんでるんだな・・・と、思った。

ちなみにこの西村舞は、主人公の幼馴染という設定で、家も隣同士、性格もよし、料理も上手なので、男だった俺から言わせると、主人公に対して、リア充死ね！って思った事も何度かあった。

今、練習中見たいなので、練習が終わったら、話しかける事に決めて、練習が終わるのを待ってみる。

ず〜と練習風景を見ていて、そしてどうやら練習が終わったので、西村舞に話しかけた。

「西村先輩、こんにちは」

「あら？あかねちゃんじゃない、一体私に何の用？」

「西村先輩に聞きたい事あったんです、孝之先輩の事で」

「孝之の事？また、あの馬鹿が何かやらかしたの？」

「はい、まあ・・・それで、西村先輩は、孝之先輩の幼馴染ですよね？」

「まあ、世間一般的にはそうね、家も隣同士だし」

「じゃあ、孝之先輩の事って、どう思っています？付き合いたいとか思ってますか？」

「あの馬鹿、せっかく私が、遊びに行こうとか誘っているのに、断るのよ？二人きりで行こうと思ってたのに・・・それに、孝之のためにお弁当とかも作ってあげてるのに、感謝の気持ちもないのよね・・・まあ・・・私が好きでやってるんだけど・・・」

「やっぱり好きなんですよね？」

「そう言われれば・・・そうよ・・・もしかして、あかねちゃんも孝之の事が？と言う事は、ライバルになるわけ？」

「いえいえいえ、私なんか孝之先輩の事が、好きな筈ないじゃないですか、先輩？実はですね？孝之先輩の事を好きな人、他にも三人ぐらいいるんです、すごいモテますから、孝之先輩、きっと他の女性から、声をかけられるとか、ありますよ？」

「そうなの？ほ・・・それは、知らなかったわね？孝之に問い

ださないと！」

「だから、孝之先輩の事が好きなら、GETして下さいね？私としても、その方がいいですし、じゃあ、よろしくお願いします」

そう言つて、お辞儀をしてから、西村舞から離れて行った。

よし、これで、攻略対象全員に声をかけたから、あとはどうなるか  
つて感じだな？

学校に残っていると、主人公に声をかけられそうなので、水無月あかねの家に、戻る事にしたのであった。

〜第六話〜 一目目〜西村舞〜（後書き）

うん、毎日のアクセスが二百人以上って凄いですね。  
こんな事初めてで、ちよつと驚きです。

これで、攻略対象キャラ全て、揃いました。

うん、ここからどう書くかな・・・って、悩みます。

ちなみに自分は、ゲームはあまりやらなくて、やると言っても最近  
は、落ちげーの「ぶよぶよ」ぐらいですかね

〜第七話〜一日目〜夜〜（前書き）

続きの話です。

〜第七話〜一日目〜夜〜

主人公の攻略対象キャラ全員に、声をかけたので、もうやる事はないな・・・と思ったので、家に戻る事にした。

水無月あかねの家に戻ると、出迎えてくれたのは、水無月あかねの母親の、水無月文香である。

「あ、おかえりなさい、あかね」

「ただいま」

「そういえば、電話あつたわよ？」

「電話？」

「そう、え〜っと確か、初崎君だったかしら？「あかねちゃんいますか？」って言うってきたわ」

「そ、そうなんだ・・・」

「いないって言ったなら、「じゃあ、また掛けなおします」と言うてたけど、あかね？」

「な、なに？」

「初崎君って、あかねの彼氏？」

「ち、違う」

「そう？でも、私はあかねが彼氏を作るのは、全然OKよ？あ、家にも招待していいからね？」

「しないよ・・・じゃあ、着替えてくるね・・・」

なんか、文香さんも、俺が彼氏出来るの肯定派なのか・・・と、思ってしまった。

水無月あかねの部屋に、辿り着いて、制服とスカートを脱ぐ。

朝と同じく、白色のブラとパンティーが見えた。

自分で言うのもなんなんだが、結構色っぽいのではないのだろうか？

そんな考えをやめて、タンスにしまつてある服を見てみると、スカー

トやらシヨーツ？やら色々あつて、結局何に決めたとしようと、

ジャージがあつたので、ジャージを着る事にした。

家の中でジャージ・・・男の俺だったら、そんな事しなかったな？  
そう言えば・・・

そう思い、着替え終わって部屋の外に出ると、文香さんが話しかけてきた。

「あら、あかね？なんで家の中でジャージ？」

「この方が動きやすいから？」

「まあ、家で何を着ようが私は、何も言わないけど・・・、あ、お風呂沸いてるから、入っちゃいなさい、ジャージよりパジャマ用意するわね？」

そう言つて、文香さんは、移動した。

風呂か・・・、うん、どうしよう・・・ま、まあ文香さんがそう言うので、入るかな・・・と、思い、風呂に入る事にした。

浴室と書かれた部屋の中に入り、籠が置いてあったので、そこに服を入れる事にして、服を全部脱いで、風呂の中に入る。

中は、結構ゆつたりとしたスペースがあり、浴槽も足が伸ばせるくらいに、広がった。

まず、風呂に入る前に体を洗おうと決めて、シャワーのノズルを捻る。

シャワーから、お湯が出てきて、温度も丁度いい設定にであった。そして、体を洗う事にして、シャワーを浴びて、自分の体を見ている。

なんとというか・・・乳首の色が薄ピンク色をしていて、巨乳ではないので

小さな突起がある感じだった。

「でも、貧乳が好きって言う奴が、結構いるんだよな・・・」  
そう呟きながら、体を石鹸で洗っていく。なんとというか・・・いいにおいのする石鹸で、肌を洗っていると、結構スベスベな肌だった。体をしっかり洗って、下のほうも洗う事にして、まじまじと見てみる。

男のシンボルが無く、穴があいているだけで、毛が全くなかった。

どう洗っていいか、わからなかったが、慎重に洗う事にした。

洗い終わって、考えてみる。この中に、男のアレを入れるんだよね・・・と

男だった時に、見たエロビデオに出てくる女優は

「もつと、もつと突いて！気持ちいいわ〜！あん・・・」とか言っていたが、あれは本当に気持ち良かったのか？とか思う。

最初は滅茶苦茶痛いとも聞いた事あるし、やっぱり男だった俺としては、男と性行為はやりたくないな・・・と、思ったのであった。それに、この自分の体って経験あるのか？と思ったが、そこは深く考えない事に決める。

かと言って、女同士でやるのもどうかと考えたが、結論から言うと「男の姿に戻ってから、女と愛し合いたい」と、こう決めたのである。

最後に頭をシャンプーで、洗い流して湯船に浸かる。

うん、いい温度に設定されていて、結構気持ちよかった。

長く入っていると、のぼせてしまいそうなので、早めに湯船からあがった。

籠の中に用意されていたのは、ピンクのブラとパンティー

それにピンク色のパジャマだったので、結局これを着る事にした。

ブラの付け方がよく分からなかったが、なんとか付ける事に成功して、ピンクのパジャマを着る。

鏡があつたので、自分の姿を見てみると、映っているのは、水無月あかねの姿であり

まじまじと見てみると、やっぱり美少女に見える。

絶対に男とかに、声掛けられるレベルだよな・・・この容姿だと・・・

・  
そう思いながら、髪をタオルで乾かして、浴室から出ると、文香さんが話しかけてきた。

「あら、あかね、あがったのね」

「あ、うん」

「じゃあ、ご飯にしましょう、もう出来ているわよ」

「はい」

そう言つて、リビングに向かう。

リビングに用意されていたのは、カレーだった。

そのカレーをスプーンで食べてみると、料理上手だからか、物凄く美味い。

つい顔が緩んで食べていると

「あらあら、にこにこして食べてもらうと、作ったかいがあつたものね？」

「本当に美味しいから・・・」

「そう言つてくれて、ありがとね？あかね」

うん、ほんとにいい人だ。めっちゃめっちゃ俺の中では、かなりの好感度があがっているのだが。

食べ終わつて、あかねの部屋に戻る。

時刻を確認してみると、夜の10時となつていて、何をしようかと迷い、とりあえずこれからの事を考えてみる。

今日は、主人公の攻略対象者全てに声をかけたので、これなら主人公との恋愛フラグを回避出来るのではないだろうか・・・と思われる。まあまだ日にちは、六日間あるので、どうなるかは今だに不明なのだが、とりあえずこの事を記録しようと思ひ立つて、ノートに今日の出来事を記す事にした。

ノートにこう書く。「一日目、今日は他の四人と接触、主人公との出会い確立0」と、書いた。

他にする事もなかったなので、ベッドの上に乗る。

なんだが眠くなつたので、寝る事に決めた。

もし寝て、明日になり、元の姿で元の世界に戻ってたらいいな・・・と念じながら目を瞑る。

こうして、俺の一日が終了したのである。



〜第七話〜 一目〜夜〜 (後書き)

一目目終了

この物語を読んでくださって、ありがとうございます。

他の作品も投稿してあるので、よかったら見てみてくださいね。

〜第八話〜二日目〜朝〜（前書き）

零堵です。

続きの話です

〜第八話〜二日目〜朝〜

どこからか、声が聞こえる。

「・・・あかね、起きなさい？遅刻するわよ」

そんな声が聞こえたので、目を開けてみる。

視界に写りこんだのは、水無月文香さんの姿だった。

どうやら、元の世界や元の姿に戻る事も無く、俺の姿は、水無月あかねの姿のままみたいである。

状況から察するに、文香さんは、あかねを起こしに来たんだな・・・と思う。

「目が覚めた？あかね」

「う、うん」

「じゃあ、制服に着替えなさいね？ほんとに遅刻しそうだからね？」

あ、朝食は用意してあるから、着替えてから食べに来なさい」

そう言っつて、部屋から出て行く。

改めて日にちと時間を確認してみると、七月二日の火曜日で、時刻は七時三十分となっていた

文香さんに言われたとおり、着替える事に決めて服を脱ぐ。

現れたのは、ピンクのブラとパンティーで、ちよつと色っぽく感じられた。

昨日から着ているのは、ピンク色のパジャマだったので、それを脱いで、私立白稜高校の制服を着る。

制服とスカートは、折りたたんであったので、文香さんがやってくれたんだな・・・と思った。

昨日から着ているので、着方は全く問題なく、あまり時間をかけずに着る事に成功した。

そして鏡面台で、自分の姿を確認。

そこに写っているのは、制服とスカートを履いた水無月あかねの姿が映っていた。

うん・・・やっぱり戻っていないんだな・・・と、改めて実感  
そして、これからどうするか考える。

確か、ゲーム「ラブチュチュ」では、水無月あかねを攻略対象にプ  
レイをした時

今日はイベントフラグがあるのである。

確か、内容は「主人公と映画に行く」と言うラブイベントで、主人  
公があかねに声をかけて

デートに誘うと言う内容だった気がする。

と言う事は、今日、主人公に声をかけられる事になるんだろうな・・・  
と思う。

それにしても、主人公の顔って一体どうなんだろう・・・気になったが  
まあいざれ会う事になるので、深く考えない事して、あかねの部屋  
から出る。

部屋から出て、リビングに向かうと、トーストとベーコンエッグが  
用意されていた。

「あら、ちゃんと着替えたわね？時間が無いわよ？」

「分かってるよ、いただきます」

そう言つて、朝食を取る。簡単な朝食だったが、味がさっぱりして  
いて、結構美味しい。

少量だったので、直ぐに食べ終わり、出かける事にした。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい、あ、そうだ、あかね？」

「何？」

「夜、食べたい物とかある？リクエスト受け付けるわよ？」

「うん・・・じゃあ、スパゲッティで・・・駄目かな？」

「いいわよ、スパゲッティね？判ったわ、じゃあ行ってきなさい」

「はい」

そう言つて、外に出る。

うん、ほんとにいい人だ、文香さん。ゲームだと、攻略対象キャラ  
じゃないんだよな・・・

スタイルいいし美人だし、かなり男にモテルのではないだろうか？  
俺の中での好感度で言うと、今、一番なのが文香さんで、二番が理  
恵子ぐらいな感じなのである。

そんな事を考えながら、学校へと向かう。

さて、まず学校に行つてやる事は「主人公とのイベントフラグを回  
避」と言う方向で、動こうと思う。

そう決めて、行動に移す事にしたのであった。

〜第八話〜二日目〜朝〜（後書き）

アクセス数が一日平均300人以上って、凄いですね。

まだ連載して一週間もたっていないなのに

これも読んで下さって、ありがとうございます

この作品にもイラストを載せようかな・・・とか思うのですが、全くイラストを描く時間が取れません。

なので、イラストは無いと思います。

これからもこの作品をよろしく願います。

く第九話く二日目く昼く(前書き)

零堵です。

続きの話です。

〜第九話〜二日目〜昼〜

俺は、とりあえず「主人公とのラブイベントを回避」という方向で動く事にした。

通学路を歩いて、目的地、私立白稜高校に辿り着く。

自分のクラス、一年四組の中に入って、水無月あかねの席に座る。鞆を置いて、中身を机の中に入れる作業をしていると、キーンコーンと鳴ったので

授業が始まるみたいだった。

授業内容は比較的簡単な方で、別に聞いてなくてもいいんじゃないか・・・とか思いつぶせになって、寝て見る事にした。

寝て見ても、注意も何もされず、時間が過ぎて、あっという間に授業が終わる。

うん、やっぱり問題ないんだな・・・これだとさぼっても大丈夫なんじゃないか？と思っただ程である。

授業が終わったので、どうしようかな・・・と思っていると、俺に話しかけてきたのは

笹村理恵子だった。

「あかね？」

「何かな・・・？理恵子」

「さっきの時間寝てたでしょ？ちゃんと受けなくてよかったの？」

「だって、注意されなかつたし・・・」

「まあ、そうね〜、今の時期は、授業を聞いていても、あまり意味ないからね？内容もどうせ忘れるし」

「そういうものなのか？」

「あ、次の授業が始まるから、戻るわね？」

「そう言っつて、理恵子は自分の席に戻る。」

そして、次の授業が始まった。

さっきと違って、なんか先生がかなり怖い感じの人だったので、寝



るのは諦めて

普通に授業を受ける事にして、時間が過ぎる。

そして、授業が終わって昼休み、昨日と同じく学食を食べに行く事にした。

学食に辿り着くと、人がたくさんいて、結構にぎわっている。

券売機の前に並んで、俺の番になり、昨日はきつねうどんを食べたので、今日はラーメンにしてみた。

ラーメンは、直ぐに出て、それを食べてみる。

味は、まあ普通だった。これならカップ麺でも変わらないんじゃないかないか？と、思ったりした。

飯も食べ終わり、教室に戻ろうとすると、声をかけられた。

「あかねちゃん」

「はい？」

声をかけてきたのは、さわやかな感じの青年風な感じだった。もしかして……こいつが……

主人公の初崎孝之なのだろうか？見た感じだと、うん、結構もてそうに見える。

「昨日電話したけど、家にいなかったよね？でね？映画のチケットあるんだけど、一緒に行こう？じゃあ待ち合わせは、駅前でいいね？」

なんか、了承する事を前提に話が進められているんだが……

「誰がお前なんかと行くか！リア充は失せろ！」

そう言った瞬間、目の前が急に真っ暗になり、気がつくと、主人公が目の前にいてこう言ってくる。

「昨日電話したけど、家にいなかったよね？でね？映画のチケットあるんだけど、一緒に行こう？じゃあ待ち合わせは、駅前でいいね？」

……会話がさっきと同じだった。もしかして……

「……いけません」

そう言うと、再び目の前が真っ暗になり、気がつく、主人公が目の前にいて、再びこう言ってくる。

「昨日電話したけど、家にいなかったよね？でね？映画のチケットあるんだけど、一緒に行こう？じゃあ待ち合わせは、駅前でいいね？」

「・・・OK、分かったぜ・・・」

「はい、行きます」

「じゃあ、決まりだね、駅前で待ってるよ」

そう言っ、主人公はいなくなる。

原理が分かった。どうやら主人公との選択イベントが発生して、これは了承しないと無限ループするみたいだな・・・と、さすがトウルーエンド百パーセント状態。

そう簡単にはイベント回避出来ないか・・・と、思った。

この会話で、俺のやる事がきまった。それはと言っ

「主人公の選択イベントを受けながら、ループしないで、バットエンドを目指す」と。

これはかなり難しいのではないだろうか・・・？とりあえず、今日のラブイベントは

主人公と映画館に行くってきまっているので、不本意だが

一緒に映画館に行く事にするしか無いみたいなので、どう行動するか考えながら

自分のクラスに戻る。

そして、午後の授業を受ける事にしたのであった。

〜第九話〜二日目〜昼〜（後書き）

やっと主人公登場です。

あと、この物語をお気に入りに入れて下さって、誠にありがとうございます。  
ざいます。

今日で連載初めて一週間です〜

うん、この一週間で毎日のアクセス数が300以上って、ほんとすごいですね・・・

〜第十話〜二日目〜映画館デート〜(前書き)

はい、零堵です。

続きの話を投稿します。

〈第十話〉二日目〈映画館デート〉

午後の授業も簡単だったので、普通に聞きながらノートに、黒板に書かれた文字を書く作業をした。

そして、授業が終わったので、行動にうつす事にした。

主人公との映画に行く事は決まっているので、おしゃれして出かけるとかしないで、この制服のまま向かうとするか・・・と考えて、鞆を持って、校舎を出る。

そっぴや・・・駅って、どっちの方角だ？と思い、標識や地域案内図を見て、駅の場所を確認してみる事にした。

地域案内図が近くになったので、それで駅の場所を確認、駅の場所は、結構遠くではなく、水無月あかねの家から、反対方向を数分歩けば、辿り着くみたいであった。

行きたくはなかったが、回避出来そうもないので、駅に向かう。数分歩いて、駅の待ち合わせ広場に辿り着く。主人公の姿を、探してみると・・・いた。

主人公も制服のまま、時間を気にしながら誰かを待っている風に見える。

まあ、待っているのは俺だと思われるのだが・・・とりあえず、俺は、主人公に話しかける事にした。

「先輩、お待たせしました」

「あかねちゃん、待ってたよ？じゃあ、行こうか？」

「はい」

そう言っつて、主人公はいきなり俺の手を握ってきた。

「あの・・・先輩？いきなり手を握られても・・・」

「俺がそうしたいんだ、じゃあこっちだよ」

これって強制なのか？はつきり言っつて、嫌だったが・・・、しょうがないから手を繋いだまま

映画館に向かう事になった。

数分歩いて、映画館に辿り着く。

人が結構いて、賑わっていたりしていた。

「あかねちゃん？一体何を見る？」

「え〜っと・・・」

俺は、上映されている作品を見てみる。

上映されているのは、アクション物の「戦いとは非常なり」と

恋愛物の「あたしと貴方のらーめん日和」

ホラー物の「ゾンビって、くさいっす・・・」が放映されているみたいである。

うん・・・どれも内容が物凄く気になるのだが・・・この三つの中で

どれがいいか・・・と悩んで、こう言った。

「じゃあ、私はホラー物が見たいです」

「じゃあ、これだね？了解」

そう言つて、チケットを受付に渡す。

そして、受付の人が「もうすぐ上映時間なので、場所はあちらです」と案内してくれた。

映画館のホールの中は、巨大スクリーンと座席があつて、俺と先輩は後ろの方に座つた。

マジで気になるな・・・一体どんな内容なんだ？とか、ちょっとわくわくするのだが・・・。

そして時間がきて、あたりが真っ暗になり、上映がスタートする。

画面にいきなり男が出てきて、それが交通事故にあい、いきなり死亡男が目が覚めると、そこは病院の中にいて、一回死んだ筈なのに、ゾンビとして生き返っていた。

その男が、ゾンビから普通のもの姿に戻る為に、頑張ると言う話みたいである。

うん・・・すっかり夢中で見てしまった。

二時間で上映が終わって、外に出ると、もう日が落ちて真っ暗だった。

「今日は楽しかった？あかねちゃん？」

「はい、楽しかったです、いい映画でしたね？まさか、あんな風なラストになるとは思ってませんでした」

「そうだよね、あれは意外だったな、うん、あかねちゃんが喜んでくれたからよかったよ」

そう、さわやかスマイルで言ってきた。うわ・・・普通の女の子だったら

かっこいい・・・とか思っちゃうんじゃないか？まあ、俺は、普通じゃあないんだが・・・。

やべ～・・・なんか、顔赤くなっているか？俺・・・。

「あ、はい・・・誘ってくれて・・・ありがとう・・・」

「いやいいよ、じゃあ暗くなったら、送っていくね」

「あ、はい・・・よろしくです」

さりげない気遣いも完璧だな・・・こいつ・・・

うん、絶対にこいつになんか惚れてやらないぞ！と、決める。そう思いながら、主人公に家まで、送って貰ったのであった。

〈第十話〉二日目〈映画館デート〉(後書き)

アクセス数、一週間連続300人以上達成です。  
ありがとうございます。



〜第十一話〜二日目〜夜〜(前書き)

零堵です。

続きの話です。

〜第十一話〜二日目〜夜〜

主人公に送ってもらって、水無月あかねの家に辿りつく。家に辿り着いて、孝之先輩は、こう言ってきた。

「じゃあね？あかねちゃん」

「あ、はい・・・送ってくれてありがとうございます」

「いえいえ、じゃあ帰るね？では」

そう言つて、孝之先輩はいなくなる。

うん・・・とりあえず、今日のイベントは終わったので、これから起こるイベントは無いな・・・と、思い家の中に入る。

家の中に入ると、エプロンをつけた、水無月あかねの母親水無月文香さんが、出迎えてくれた。

「お帰り〜あかね」

「ただいま」

「あかね？朝に言っていた、スパゲッティーだけど、もう出来てるから、着替えて食べるにいらっしやい」

「はい」

そう言つて、俺は、水無月あかねの部屋の中に入る。

部屋の中に入って、制服とスカートを脱いで、畳んでおく。服が用意されてあるみたいなので、それを着る事にした。

なんかもう・・・この体に慣れたのか

自分の体を触ったり見たりしても、何にも感じなくなってきたな・・・？

用意された服に着替えて、リビングに向かう。

テーブルの上に用意されていたのは、温かいスパゲッティーだった。作りたてなのか、湯気が出ていて、結構美味しそうに見える。

「あ、着替えたのね？じゃあ、頂きましよう？」

「うん、頂きます」

そう言つてスパゲッティーを食べる。

うん、さすが料理上手、かなり美味しい。あつと言つ間に食べ終わつて、おかわりも要求した。

食いすぎると太るとか、女の悩みだと思うが、そんなの一切考える事はしなく、おかわりを要求。

お腹が満杯になるまで食べて、休んでいると、文香さんが話しかけてきた。

「あかね？今日遅かつたけど、何かあつたの？」

「え〜つと・・・先輩と映画に行つた・・・」

「あら？じゃあ・・・その先輩つて、もしかして昨日電話してきた、孝之君？」

「う、うん」

「へ〜あかね・・・やるじゃない？じゃあ、家に来る事もあるのかな？」

「いや、そんな事ないよ・・・？」

「私は、家に招待してもいいわよ？あ、でもね？」

「でも・・・？」

「性行為をするんだつたら、ちゃんと避妊はしなさいね？まあ子供が欲しいつて言うなら、私は止めないけど」

冗談じゃない、誰がそんな事をするか！と、思った。

「い、いや、しないよ！」

「そう？まあ、高校生なんだから高校生らしい付き合い方しなさいね？あ、お風呂沸かしてあるから、入つて来なさい」

「う、うん・・・そうする」

そう言つて、俺は浴室に行く事にした。

着てる服を脱いで、タオルを持って、浴室の中に入る。

まず最初にシャワーを浴びて、石鹸で体を洗う事にした。

昨日も洗つたので、もうやり方は大体分かつてるので、念入りに洗つていく。

胸とか腰とか足首とかも洗つて、最後に頭を洗う事にした。シャンプーで頭を洗いながら考える。

確かに映画は楽しかったと、まあ主人公と一緒にだったのが、残念だったのだが・・・と

洗い終わって、浴槽に浸かる。

風呂の温度は、いい感じに設定されていて、結構気持ちよかった。長湯すると、のぼせてしまうので、早めにあがって、用意されている服に着替える。

昨日と違って、下着の色が青だった。なかなか色っぽいデザインでもある。

これを履いて、男を誘惑とか普通の女の子だったらするのかな・・・とか、思ったが

俺はそんな事しないぞ！と誓い、下着とブラをつける。

そして青色のパジャマが用意されていたので、それを着て、あかねの部屋に入る。

部屋に入って、ノートにこう書く。

「二日目、主人公に映画に誘われる、なるべく好感度を下げる方向で動こうと思う」と

そうノートに書いて、時計を見てみると、結構遅い時間になっていたので、ベットに入る事にした。

ベットに入ってから、考える。

明日はどう動こうか・・・と、そう考えていると、眠くなってきたので、瞼を閉じる事にした。

こうして、二日目終了したのである。

〈第十一話〉二日目〈夜〉（後書き）

零堵です。

この物語、書いてて結構楽しいですね。

毎日のアクセス数が300以上と言うのが、自分の中では驚きです。

あと、こんな物語をお気に入りに入れて下さって、誠にありがとうございます。  
ございます。

これからも、この物語をよろしく願います。

〜第十二話〜三日目〜朝〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第十二話〜三日目〜朝〜

目が覚めると、見慣れた天井だった。

ベットから降りて、時刻と日付を確認してみると

七月三日、水曜日の7時と表示されている。

結局元の姿には戻らないのか・・・と、思い、今日の出来事を確認してみる。

確か、ゲーム「ラブチュチュ」だと、主人公から声をかけられる事は無かった筈。

じゃあ、今日のやる事は、「他の攻略対象者と主人公をくつつける」という方向で、動こうと思う。

でも、誰から声をかけるかだが・・・一番声をかけやすいのは

やはり幼馴染の西村舞あたりから、話しかければいいのでは？とか思ったりした。

早速行動にうつす事に決めて、まず着替える事にする。

着てる青色のパジャマを脱いで、下着姿になる。

下着もパジャマと同じく、青色だった。

うん、まじまじと見てみると

やっぱり色っぽい、結構素材もいいのを使ってるんじゃないか？と思われる。

そう考えてから、制服とスカートを履く。

制服に着替え終わって、鏡面台で自分の姿を確認する。

そこに映っていたのは、水無月あかねの姿で、ちっとも元の男の姿には戻っていないかった。

鏡を見ながら、髪型とかを調整して数分後

決まった形になったので、うん、これでいいか・・・と思う。

うん・・・この体になって、なれたんだろうか・・・とか思い

というか、本当に俺・・・戻れるのだろうか・・・？とも、思ってしまった。

まあ、それは深く考えない事にして、水無月あかねの部屋から出る。部屋から出て、リビングに行く。

テーブルの上に、ご飯とみそ汁、焼鮭におしんこ

朝の朝食セットみたいな感じの朝食が出来上がっていた。

そして、水無月あかねの母親の水無月文香さんが、話しかけて来る。

「おはよ？あかね、今日は遅刻する事なく、起きたのね？」

「う、うん」

「朝食出来てるから、食べて学校に行きなさいね？」

「はい」

そう言つて、俺は、用意された朝食を食べる。

さすが料理上手、和食もかなり美味かった。

直ぐに食べ終わつて、鞆を持って、外に出ようとすると、文香さんが話しかけてきた。

「あ、そうだ、あかね？」

「何？」

「今日、遅くなるから、夕飯用意出来ないかも知れないわ、出来なかつたらごめんなさいね？」

「分かった、出来て無かつたら、自分で作るよ」

「そうしてもらえると助かるわ、あれ？それにしてもあかね？料理出来たっけ？私、あかねが料理を作っている所、見た事がないのだけど」

「私だつて、やろうと思えば出来るよ・・・」

「そう？じゃあ、作つたら私にも食べさせてくれない？ほんとに上手なのか気になるしね？」

「あ、うん、わかつた、じゃあ、いってきまゝす」

そう言つて、家を出る。

そうか・・・文香さん、いないって事もあるのか・・・

まあ、料理に関しては、ちょっと自炊とかした事もあるので、自信はあるのだが・・・。

まあやるかどうかは分からないので、いながつた時に作ればいいのか



な・・・

とか思い、学校に向かう事にした。

とりあえず、今日のやる事は「主人公と他の攻略対象者の仲を良くさせる」

と言っ方向で動こうと思っのであった・・・

〜第十二話〜三日目〜朝〜（後書き）

続きの話を投稿します。

この物語を読んでくださって、ありがとうございます。

〜第十三話〜三日目〜昼 西村舞と遭遇〜（前書き）

零堵です。

続きの話です。

第十三話 三日目 昼、西村舞と遭遇

俺は、まず学校についてからやる事は、他の攻略対象者と主人公の仲をくつつけると言う方針に決めた。

学校にたどり着いて、水無月あかねのクラスの中に入り、自分の席につくと

笹村理恵子が、俺に話しかけてくる。

「おっはよゝあかね」

「おはよう、理恵子」

「あかね？」

「何？」

「昨日さ？私、見たんだよね〜先輩とデートしてたでしょ？」

「昨日・・・う、うん、私としてはデートって感じじゃなかったんだけど」

「え〜？だって、先輩と手を繋いで二人で、歩いてたじゃん？二人つきりだからデートでしょ？」

「理恵子がそう思うのなら、そうなのかな・・・」

「そうだって、ついにあかねにも彼氏が、ちよつと寂しいかも？なんてね」

「か、彼氏じゃないよ！それに、先輩が好きな人って他にもいるし、先輩凄くもてるから」

「ふ〜ん、じゃあ、あかねも先輩の事、狙ってるんだ？」

「ね、狙ってないよ・・・」

「まあ、私は応援するわよ？頑張りなさい」

いや、頑張りたくないのだが・・・。

そんな感じに話していると、キーンコーンとチャイムが鳴ったので、授業を受ける事にした。

授業内容は比較的簡単で、黒板に書かれた文字をノートに写したり、先生に当てられたので、教科書の文章を読む程度で、時間が過

ぎる。

授業が終わって昼、俺はと言うと、学食に行く事にした。学食に向かうと、相変わらず人が多い、まあ皆考える事が同じなんだな・・・と思う。

俺も、並んでいるので並ぶ、そして数分たって俺の番になり、券売機のボタンを押す。

今日は、ハンバーグ定食にして見た。

食券を購入して、受付に渡して、すぐにハンバーグ定食が出たのでそれをもってあいている席を探していると、知っている人物を見つけたので、声をかける。

「西村先輩、隣り空いてるので、座っていいですか？」

そこにいたのは、主人公の幼馴染で、攻略対象キャラの西村舞先輩であった。

「あ、あかねちゃん、まあいいわよ、どうぞ」

「じゃあ、お邪魔します」

そう言つて、西村舞の隣の席に座る。

うん。改めてみると、水色の髪が綺麗で、胸も大きく、ほんとに美少女に見える。

「あかねちゃんは、ハンバーグ定食にしたんだ？」

「はい、先輩は、きつねうどんなんですネ？あれ？先輩って、いつもはお弁当作ってるんじゃないんですか？」

「今日は、ちよつと寝坊しちゃってね・・・お弁当作る余裕なかったの・・・だから、ここで昼食を済ませようって思ったわけ、あかねちゃんはお弁当作らないの？」

「私は、作りませんね、朝はお母さんが用意してくれてるので、昼は学食中心です」

「そうなんだ」

「あ、そう言えば先輩」

「何？あかねちゃん」

「昨日、私、孝之先輩にデート申し込まれてたんです、今日も先輩

に話しかけられるのはちょっと嫌だな・・・って思ってますので、孝之先輩の事、遊びに誘ってみてはどうですか？」

「ほ～・・・私が昨日、孝之の事探してたのに、そんな事があったのね？あかねちゃん、教えてくれてありがとね？そうね・・・確かに、孝之が他の女の子を誘うのはなんか嫌だわ、さっそく誘ってみるね」

「はい、先輩、頑張ってください」

そう言って、俺は、ハンバーグ定食を食べ終わった。食べ終わってから、こう言う。

「じゃあ、私は、戻りますので、先輩の事、よろしくお願いします」  
「ええ」

そう言って、俺は教室に戻る事にした。

戻る途中、主人公の初崎孝之を見つけた。

こっちから声をかけるのは嫌だったので、俺は主人公に見つからないように移動する。

何とか見つからずにすんで、教室に戻る事に成功。あとは、先輩に会わないようにする事だな・・・と、思いながら、午後の授業を受ける事にしたのであった・・・

↳第十三話↳三日目↳昼↳西村舞と遭遇↳(後書き)

この物語を、読んで下さってありがとうございます♪  
アクセス数も凄いですね・・・ほんと

〜第十四話〜三日目〜午後、笹村理恵子と遊び〜（前書き）

はい、零堵です  
続きの話です。



〜第十四話〜三日目〜午後、笹村理恵子と遊び〜

午後の授業も普通に終わって、放課後。

俺は、どうしようかな・・・と悩んでいた。いたりして。

そのまま帰ってもいいし、それとも他の攻略対象キャラに話しかけてみるのありか？とか、思っていると、笹村理恵子が話しかけてきた。

「あかね？」

「何？」

「今日さ？遊びに行かない？ゲーセン行こうよ？」

「ゲーセンね・・・」

「あ、もしかして予定入れてる？」

「いや、入れてはいないけど・・・」

「じゃあ、決まりね？早速行きましょう」

「あ、うん」

ま、理恵子と二人で遊ぶのもありか・・・と思い、俺はOKする事にした。

学校を出て、制服のまま街の中を移動して、駅前に辿り着き、駅から数分歩いた場所に、ゲーセンがあった。

そのゲーセンの名前は「ゲームズ」と言って、なんか元の世界に出てくるお店の名前に、そっくりだな・・・とか思う。

その店の中に入ると、店内は異常にライトアップされていて、眩しいくらいだった。

「じゃあ、あかね？どれからやる？」

「そうだなあ・・・」

俺は、店内を見渡して、置いてある機械をしてみる。

ビデオゲームに体感ゲームにリズムゲームやクレーンゲームなど、いろいろな機械が置いてあった。

ちなみに中身も元の世界にあった物と大体同じで、知ってるゲーム

がほとんどである。

「あ、そういえば理恵子は何が得意なの？」

「私？そうね・・・音楽ゲームは得意よ？あかね？あれ、やらない？」

そう言っただけで理恵子が指さしたのは、ギターの形をしたリズムゲームで、「ギターミュージック」と書かれている。

「わかった、やるうか？」

「お？あかね？自信ありげ？」

「まあ、やった事ある物だから」

「ならOKね？早速始めましょう」

そう言っただけで、お金を入れて二人同時プレイを選択する。

ギターを持ってみると、うん、なんかちょっと重い、女になって体力落ちたか？とか思ってしまった。

曲を選んで難しさをいきなりエキスパートにしようとした、うん・・・クリアできるか・・・？とか不安になったが、なんとかクリアする事に成功。二曲目も難しい曲に選曲されて、かなり指を使ったので結構疲れてしまった。

クリアした後、理恵子がかう言ってくる。

「あかね・・・やるわね？まさかこんなにうまいなんてね」

「そう言う理恵子こそ、相当うまくない？」

「まあ、私も何回もやってるしね？これ、は〜いい汗かいたわ」

「じゃあ、他のやるうよ？こればかりやってると、指いたくなるよ？」

「まあそうね、あかねの言うとおりにしましょうか」

そう言っただけで、俺と理恵子は、別のゲームをやる事にした。

次にやったのは、クレイニングゲームをやった、ヌイグルミとお菓子を一つずつゲットする事に成功し、理恵子が最後に「プリクラ撮ろう〜」とか言ってきたので、理恵子と一緒にプリクラを撮る事にした。うん・・・こう言うの初めてだな・・・男だったら、デートって感じだと思うのだが・・・。

ブリクラを撮り終わって、どうしようか考えていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「孝之、次、あれやるう？」

「あれ？どれだよ・・・」

「孝之は、僕とあれにしよう」

「ユウ・・・お前もか・・・」

「ちよつとユウ君、私の決めたのがいいって？」

「僕の方がいいと思うんだけど・・・孝之はどう思う？」

「俺に振るな・・・」

そう言っていたのは、西村舞と沖島ユウと主人公の、初崎孝之だった。

そうか、ここに遊びに来てるんだな・・・

沖島ユウは男の格好をしているのだが、正真正銘女なので、一言で言うと

ハールム状態じゃないか？とか思う。うん、リア充死ね！って言いたい。

「あ、先輩達も遊びに来てるみたいね？孝之先輩いるよ？声かけないの？」

「いいよ、邪魔しちや悪いし」

「そうね、その方がいいかも、なんか喧嘩してる風に見えるしね」

「うん、あ、それよりこれからどうする？」

「とりあえず遊んだし、もう、帰ろっか？」

「りょくかい」

そう言っただけ。お店から出て行く事にした。

店から出ると、理恵子がこう言っただけ。

「今日は楽しかったよ？あかね、また遊ぼうね？じゃね」

「うん、さよなら」

そう言っただけ、理恵子と別れる。

ここにも、主人公に見つかる可能性があるんで、俺は、家に帰る事にしたのであった・・・



〜第十四話〜三日目〜午後、笹村理恵子と遊び〜（後書き）

アクセス数すごいですね、ほんと・・・  
読んで下さり、お気に入りにも入れてくださってありがとうございます。  
ます。

あとジャンル別週間ランキング（学園）に載りました。順位も結構  
上位なので、嬉しいです。  
これからもよろしく願います。

〜第十五話〜三日目〜夜〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第十五話〜三日目〜夜〜

笹村理恵子と別れて、俺はと言うと、水無月あかねの家に戻る事にした。

家に戻ると、家には鍵がかかっている。

呼び鈴を鳴らしても、返事がないので、どうやら文香さんが留守だと思い、どうやって中に入るうか・・・と考えて、靴の中身を探してみる。

よく探してみると、鍵を見つけたので、それが家の鍵なのか不明なのだが

鍵穴にその鍵を差し込んで、回してみると、扉が開いたので、中に入る事に成功した。

中は誰もいなく、電気もついてないので、暗くなっている。

まず俺はと言うと、あかねの部屋に入って、制服を脱ぐ事にした。制服とスカートを脱いで、下着姿になり、箆笥から着る服を選ぶ。

何にしようかな・・・と迷い、白色のサマーセーターと青色の半ズボンを着る事にした。

うん、通気性がいいからか、結構涼しく感じられるな・・・着替え終わって、あかねの部屋から移動して、冷蔵庫を開ける。

色々な食材が置いてあり、何を作るか迷って、炒飯を作る事にした。炒飯に必要な材料を冷蔵庫から取り出して、フライパンに油をひく。そして、ご飯と玉葱と豚肉を炒めて、最後に卵を混ぜて、完成。

焦げ付く事無くできたので、まあまあかな・・・と、思ってしまった。

お皿に盛り付ける作業をしていると、扉の開く音がしたので、気になって見に行くと

文香さんが帰ってきた。

「ただいま、あかね」

「おかえりなさい」

「あら？このいい匂いは・・・もしかして、夕ご飯作っていたの？」

「うん、炒飯を今、作った所だよ」

「あら、じゃあ私もいただこうかしら？」

「うん、いいよ？食べてみて？」

そう言つて、俺は文香さんにも、作りたての炒飯を出した。

「じゃあ、頂きます」

「頂きます」

そう言つて、二人で炒飯を食べる。

うん、なかなか美味い、文香さんはどう言つた反応するのか、ちょっと気になつてしまった。

「ど、どう？」

「うん・・・まあまあね、ちょっと調味料のバランスが悪いけど、まあいけるわよ？」

「よかつた」

「でも、もうちょっと工夫すると美味しくなると思つわ、その所は頑張つて見なさいね？」

「あ、うん、そうしてみるよ」

そんな会話をしながら、食べ終わつて、休憩していると

「あかね、お風呂沸いたから、入ってきなさい」

「はい」

文香さんがそう言つたので、浴室に向かう事にした  
浴室の中に入つて、服を脱ぐ。

最初は脱ぐのにちよつと苦労したが、今じゃスムーズに脱ぐ事が出来た。

うん、馴れつて恐ろしいな・・・とか、思う。

最初にシャワーを浴びて、石鹸で体を洗つていく。

改めてみると、やっぱり自分の体は綺麗だった。肌が全く荒れていないし

まあ貧乳なので、それほど胸が大きくは無いが、足とかが結構綺麗だった。



全身を洗って、最後にシャンプーで頭を洗い、浴槽に入る。

温度がいい感じに設定されて、あまりにも気持ちがいいので

口笛を口ずさみながら長湯をしてしまった。

風呂から出て、用意された服に着替える。

用意された服は、緑色の下着に緑色のパジャマだった。

うん、この家に一体何色の下着とパジャマがあるんだ？とか思ってしまったが

深く考えないようにして、用意された服に着替える。

そして自分の部屋に戻り、ノートを開いて、こう記した

「今日の出来事、主人公との接点無し、笹村理恵子と遊びに行く」と、書いた。

そして、ベットに入り、眠くなって来たので、そのまま寝る事にした。

こうして、一日が終了したのである・・・

〜第十五話〜三日目〜夜〜（後書き）

アクセス数凄いですね〜ホント

感想くれたりすると、作者のやる気があがり致します。

これからもこの物語を、よろしくお願いします。

〜第十六話〜四日目〜朝〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第十六話〜四日目〜朝〜

ジリリリリリと鳴って、目が覚める。  
気がつくのと、昨日と同じ天井だった。

俺は、ベットから降りて、日付と時間を確認する事にした。

日付は七月四日の木曜日となっていて、時刻は七時となっている。  
ゲーム「ラブチュチュ」で、水無月あかねと主人公のイベントって  
何があったかな・・・と思ったが  
全く覚えてなかった。

ま、何とかなるだろ・・・と思い、着ている緑のパジャマを脱いで、  
下着姿になる。

下着もパジャマと同じ緑色で、ちょっと色っぽいデザインでもあった。

もうこの姿になっても、全く興奮しないな・・・まあ、自分の体だし・・・

と言うか、男に戻って、ちゃんと女に欲情するのだから・・・とも不安になってしまった。

とりあえず、深く考えない事にして、学校の制服に着替える。

着替えてから、鏡面台で身だしなみをチェックして、自分の部屋から出て、リビングに向かった。

リビングに向かうと、朝食をテーブルに並べている、エプロン姿の水無月あかねの母親

水無月文香さんがいた。

「あら、あかね、おはよう」

「おはよう」

「今日も起きたのね」

「うん、時間通りにおきたよ」

「そう、朝食出来てるから、食べなさい？」

「はい」

そう言っただけ席に着く。

今日の朝食は、コーンフレークに野菜炒めだった。

コーンフレークと野菜炒めを食べていると、文香さんが話しかけてきた。

「あら、あかね？」

「何？」

「ミニトマト食べられるようになったの？いつもは、出しても残してるのに」

「う、うん、好き嫌い無くなったんだ」

そうか・・・水無月あかねって、ミニトマトが嫌いだったのか・・・それは、知らなかったな

まあ、今更食べても別に問題はないと思うので、そのまま食べ続ける事にした。

「まあ、好き嫌いが無くなる事はいい事だわ」

「う、うん、そうだよな」

そう言いながら、食べ終わって、自分の部屋に戻り、鞆を持って、出かけようとする

文香さんがこう言っただけ。

「あ、あかね、これ、持って行きなさい」

そう言っただけ、俺に渡してきたのは、青色のスモールバックだった。

「これは？」

「これはって・・・今日、必要な物が入ってるの、忘れちゃったの？あかね？」

「え、あ、うん、ちょっと忘れちゃった、ありがとう」

「それと、昨日は遅かったけど、今日はちゃんと家にいるから、夕飯期待しててね？」

「あ、うん、分かった、じゃあ、行って来ます」

そう言っただけ、俺はスモールバックを受け取って、外に出た。

今日必要な物？一体何だろうな・・・と思っただけ、スモールバックの中を見てみると

そこに入っていたのは、紺色のスクール水着だった。  
と、言う事は・・・今日、プールの授業があるって事か・・・  
と言うか・・・これ、サイズ合ってるのか？とか思ったが  
遅刻するのも何なんで、その時考えればいいか・・・と思い、学校  
に向かう事にしたのであった・・・

〜第十六話〜四日目〜朝〜（後書き）

アクセス数が本当に凄いですね

毎日二百人以上に読まれていますし

読んで下さって、真にありがとうございます〜

〜第十七話〜四日目〜午前〜プ〜ル〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。



〜第十七話〜四日目〜午前〜プール〜

青色のスモールバックを持って、俺は、学校の中へと入る事にした。自分のクラスの一年四組の中に入り、自分の席に着いて、鞆とスモールバックを机に置く。

鞆から教科書やノートを机の中に入れて、授業が始まるのを待つ事にした。

そして、キーンコーンとチャイムが鳴って、授業が始まる。

授業内容は、難しい問題とか全く出なく、先生に当てられもしないので、比較的簡単に終わった。

授業が終わって、クラスメイトが荷物を持って、移動しているのもしや・・・

プールの授業か？と思い、俺もスモールバックを持って、クラスメイトについて行く事にした。

たどり着いた場所は、外の建物で、部屋名に「女子更衣室」と書かれている。

入るのがちよつと躊躇ったが、俺も一応女なので、勇気を出して入る事にした。

中は下着姿の生徒と水着に着替え終わっている生徒がいる。

この状況って、男だと天国じゃないか？とか思うのだが、まあ、俺も同じ同姓なので

あいているスペースを探して、着替える事にした

まず着ている制服を脱いで、下着姿になると、俺に話しかけて来る者がいた。

「あ、あかね？？なかなかいい下着着てるね？」

そう言っただけ来たのは、青色の下着姿の笹村理恵子である。

うん、マジマジと見てみると、やはり胸が大きい、軽くD以上あるんじゃないか？と思われる。

「そ、そう？」

「うんうん、まああかね、胸小さいよね？いいなあ・・・私なんて、大きいから肩こっちゃってさ？ちよつと揉んでくれない？」

「え〜つと・・・揉めばいいの？」

そう言つて、俺は理恵子の肩を揉む。

な、なんだ？この感じは・・・真正面で揉んでるので、胸の谷間が丸見えだった。

なんかすげえいい匂いもするのだが・・・

「あ・・・あん・・・そ、そこ〜気持ちいいわ〜」

「ちよ、ちよつと変な声出さないでよ」

「だって、ほんとに気持ちいいんだもん、そうだ、私も胸が大きくなるように揉んであげよつか？えい」

そう言つて、理恵子が胸を揉んで来た。

「ちよ・・・あ・・・」

「おやおや〜？もしかして、感じちゃったとか〜？」

「な、何言つてるの！そ、そんな訳・・・」

「と言つてるけど、顔が赤いわよ〜？そうか〜私のテクで感じましたか〜、私もいい腕してるわね〜」

「か、感じてなんか・・・ひゃ・・・」

「体は正直よの〜つふつふつふ」

なんか理恵子の目が怪しく光ってるんだが・・・

そんな感じが五分ぐらい続いて、気がつくくと、俺と理恵子の二人しかいなかった。

「ね、ねえ、理恵子、遅れると不味いんじゃない？」

「あら、そうね〜というかあかね？水着に着替えてないじゃん？」

「理恵子が胸揉んで来たからでしょ！！」

俺は、そう言つて素早く、紺色の水着に着替えた。

理恵子も水着に着替える。

理恵子と比べると、明らかに胸の大きさが違った。

やっぱり理恵子って、スタイルいいな・・・とか思う。

「じゃあ、行きましよう」

「うん」

そう言っつて、女子更衣室を出て、プールサイドに向かう。プールの広さは、25Mプールだった。

最初に準備運動をして、そしてプールの中に入る。

プールの中は、水温がちょっと冷たく

まあ日差しがかんかんに照り付けているので、結構気持ちよかった。

気ままに泳いでいると、理恵子が話しかけて来る。

「あかね〜25M競争しよ〜」

「いいよ」

「ちなみにあかね？平泳ぎとクロールどっちで勝負する？」

「じゃあ、クロールで」

「了解、じゃあ行くわよ」

そう言っつて、スタート位置に並ぶ。

俺が1コースで、理恵子が2コースだった。

「じゃあ、よ〜い・・・ドン！」

そう言っつて、俺と理恵子は、プールに飛び込む。

結果はどうなったのかと言っつと

数秒の差で、負けた。

「あかね・・・やるわね・・・まあ、私が何とか勝ったけど・・・」

「理恵子こそ、泳ぎ上手じゃない？水泳部とかに入ったら？」

「いいよ、私、自由でいたいしね〜」

「ふ〜ん」

そう言っつてから、しばらくプールの中で遊んでいると、キーンコーンと鳴ったので

プールから出て、女子更衣室に向かった。

水着をスモールバックに入れて、制服に着替える。

着替え終わっつて、教室に戻ると、異様に眠くなつた。

次の授業もあるのだが、眠気には勝てず、そのまま俺の意識は、途切れたのであつた・・・



〜第十七話〜四日目〜午前〜プール〜（後書き）

この物語を読んで下さって、ありがとうございます。

ちなみに自分はここ五年間

プールや海で泳ぐとか経験しておりません。

学生時代のプール授業が最後かな・・・とかだったりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8720y/>

---

気が付いたら、攻略されそうです・・・

2011年12月11日10時53分発行